十六

小兎戒草

文政庚辰新刊

小兒戒草

板貯倫閣書屋

夫小兒之病口不能言當其卒暴之際餘愕失措不及請醫遂致枉扎刱捧掌珠暮歸黃壤豈可不哀乎同僚岡勁齋有慨于此爲據依于番月翁書附以見聞所得著小兒戒草一卷凡有兒

之家預熟于坎書保護得宜則
免抵扎之患矣文政己卯之冬勁
齋被示余于拔宮直舍余因勸之
開版廣布遂援筆書于首

菁園元方題

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文政三庚辰三月

[illegible]

小児はまし[illegible]

小児初て産れかゝる時[illegible]

の産れる所汁と織べし初産一夜の小

服に入てよろづの病を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又は湯をつゝ[illegible]べし[illegible]衣服とあらし[illegible]小児と

つゝ[illegible]ゝ[illegible]胞衣と共[illegible]

大ようの紙燭とともに一時毒のうへと仕
て境切でしかくのうくるハ塊なる歟小児の
のほを通りて たらくの宮を元気越りて
おりのうとのうきぶ児ハまハ落ると五ようの人参
附まかい成用ひハ陽薬ハ小しとて色
黄ようえんをそまともでし時毒とろう収
のかとうとろうるまへしし時毒ようとと
ようくをぶりてを選のかうくやうかすでし
神湯のわしとまくこと心分てしを選まりしとうハ

ようぶ中ようへ入り播ドくふ底はかしとおかく
死ようい
神湯の事
小児虚弱うして神湯を食しう孫又ハ乳親わ
うくくかく脾気弱く乳離ひゆるかうハまろ
神湯ばとを見しかりあと業まと成ひ業ようと
又三つめの湯としてまんて三日のうを乳ひ切らかと
まろハ湯ーしをうしー丑の月ハうくへつをの月
ハ古日ひしも見ていかく業かうハ始ようひ湯

あびたて
始て乳つくる事
小児まれて面部四肢とともにみな赤く腐爛
のいろ深く脾臓厚くゆつく腹脹胃素弱く
大便小便通しあるものこれ胎毒胎熱なり
深くなりもしやうと医者を見て大黄芒硝を
のまんとのまを又見ようと黄連を使用ひ胎
毒をとる〳〵小児をしめて乳を始る所まてを
胎毒をとりくをそもねばやうつくるあとのなり

西部廣吉の血色逆くまま兒素をみるを赤くす
くなり黒黄毒のるるを隠ひて色うすし黄ばみ
て後ほ黄汁のいろなりうるなりて乳汁
乳汁飲ゐむ〳〵この時逆乳はらつて兒堂心
るれば乳をとめて味もつる赤黄汁を
必すれば外の知るのつくすしやもに一度乳とな
るは胎毒外へ入れ流りて下りうるく黄毒
の除りて後ほ青り種しの病とおひすしあて
は根口不乳驚口癌胎毒時ほ治をて頭瘡

と雖一又は胎毒吐乳の症と者しそうと急べしこれ
の大急病なり小児たとへ飢るまゝにあらく嘔むづかるも
病の患とうて五臓のつかさどる乳とめとふべ
しまたまた虚弱の小児ことに乳とのみてもまた
乳とつけてし胎毒と平し乳と有るの医師
つとを肝要なり此上なの医師と申すべし
このとき胎毒つよく後に肝しあるべきの
事なれども胎毒とは深切なる心と乳

こんなし小児の病かくのごとくしきまつたくこの所
よりうとうとうとも陽べとは胎毒吐乳なり其
病の源とまゝなりつゝあるべし
乳母のあるは産婦の天理の自然なれば母の乳と
乳のまゝ一世借形乳と為へ腸胃と頂戴て
産婦の乳とあるべのゆうとくとしやうけて
出るとうなるべ産婦の乳とのなるべし胎毒とは
胎毒はなるとも
胎毒と別事

胎髪は大抵七夜よりあとに剃事なり
虚弱の小児なりしは日数延しなるべし
なる小児は三日剃るべし小児は陽素なる
ゆえ人は頭髪よりはじめて胎毒をすけし
わしめす世の人胎髪とて生まれ出るを
綿と載せ置きわらべを入れしこれを
ちらさずして厨子かしの角につるしおくべし
初参事
小児の衣服はやはりあと本綿をそえし縫帯は
腹へべしはそのはじめも火をもつかべしすべて人の
肌へ直に火をあてるまじきなり
燈かりを点ずる火をもつかべしすべて人の
いまだ知らざるを肌へ直にあてるべし衣服
をもつかるときは横縫
あるときは戸障子
風呂かまどしかし脚へ風のあたるまじきなり
すべしかるときは脚へ腰へ腹へかけての
の病を発すべしちゑべし
脚絆帯の事

小児時に手足ほう疹しるしあるは丈夫の生まれつきなり
て出しるし結して脇腹をとりて立へし小便出て
常水腎部のかさ中ちまて〳〵湯のびまするとき
をのわと乾ずいまとみうけるあるは軽と手のむ
きてかさへて湯のかちみまちまて〳〵脇腹部
撫とりあるとおとりかう脇腹部撫るあと発する
すあり〳〵あるは光堂ありまいこのまま
脇腹をとりけ大小便通下りくかう又は管底
命〳〵乳とのとうるとの多いとつて虚弱の小児

うろくするもとし

不乳

小児生れて後乳とは未けとあるとのみうみあるとれ
ば陽るへし東越虚弱元気不足して乳ありまぬ
ろう脇腹つく脇満堅鞕して乳とのとあるはり
又は痛熱ずれかうまく泡く舌本節苦て乳をこのあ
ともあるとうはいつまとやすうみ痛るうとやく
腫るあるふて痛ぶまて〳〵又結まてつかうなる乳を
まてはうまとうとあるみて乳のまてあるはうまぬあり

乳首のような乳頭小し或は乳房のうつくしのみつきうるおり右手の掌ゆしは乳母をえらびの法をはかりてのみつくよのかり

腫は

腫は初生の子皆一の熱病ありこの病七夜の間よりはじめて出つしかし其候面目笑じみおくをまとはり直反張暫発帯あるいは乳息嘔息舌強り直脈とかく吹ふ光ひとう白き法とまし面と聚はと腫を乳と飲るはと学児母のけつづきは吹く

口つきのごとく故けつづきむしとは口腫とつよも食ことを悪病あり右のごとく中しもきしはしばしば上よの医者よ言て腫毒とおもへしとんかけは法法すると天は稗稗とのあるとき風まのうあるは水腫の案病とう入て邪案経絡を侵うと発する病破傷風の病の陳しおかしとうと悪毒とて療治しかしとうは治へし

発日病

小児乳と甘のすしのてとうは指を舐を乳母温水

むし口中舌上に出るなり　胎毒つよき
小児ハ中もしくハ舌上へあらわれ腫れ出ること
しるしと世伝古方ともに胎毒の病
きらう物のうんとして腹とりと口中舌上の疱とくく
ゆらいいきすべし　粒と胎毒ハ
胎毒つよくハ母ときのみつくろうて乳と
ともにあたえてあるべし　医者ことさら療治
胎毒腹痛
小児生れて百日ばかりの間ときどき腹満反張して頭
汗を流し啼哭色青くなり　胎毒腹痛多くハ
大便通じもなく又ハ五六日ときどき通じ腹満
ときどきの痛とおすまつ熱腫とときのまに
ときどきの発熱　医者ハ吉凶と腹痛
大便通じ　腹満減じ　ときの痛もしづ
まる
胎毒の病ハ小児元気弱く神魂定まらぬ
まあやしきもの物とも世間ハ別しと昼のゆめ
ものかとなりの心神と驚き　踊さわぎ

驚搐脈は見つゝ舌を出し手足と動し痙
搐と云死ふるかゝり病の驚し恐るゝと恐
れ驚くとふこゝ九陽病の病の驚しゆゑ
うと慢驚風とふ陰病の慢驚風ゆゑ
吐乳の後まこゝ千利のち脾胃の虚弱
て食するとのあり小児脈うの中る紙に帝ま一或
手足は微搐し驚こふけく脈と見もくるこ
この病のうすりとうるこしく上手の医者
ゝ病治とこゝ也せするまるの小児

第一の邪病あり
驚風ゆゑ驚搐手足と呼吸とも伸
搐一脈と上へつゝ病の驚い高ゆゑ
痙搐とゆゑ飲上しゝ痙搐つゝ喉ゆゑ
生母の乳ほの汁とゆゑ入へしまこ世間通例の
茶ほ茶ほ能脾薬なのかけく〳〵ゝ九ゆゑ
を陽ゆゑ曲とかしゆゑ〳〵ゝ
のゝくする門ゆゑ医者はゆゑ痙治成
ゝあ一ゝ者ゝ本ゝ其病ゝ寒ゝの

二症のれハ一月ハ心ほて灸をおほくすへうらす浮のを
医者にお談して手当すへし小児の癇症ハ
驚風にて驚癇とも天弔神風ま門風ま
云へ灸ともし又それも御門起ちて後ハ決して又大ま
して大火傷となることれ世俗一般の事なりとれ恐す
るて驚癇ハ府症灸治いもす邪病なり
の談説取いてむつかしくいふハあるそ又と天弔
内へ入て宮ともかく驚風症ハ起ちもの也
小児ハ元気虚弱のさのかれハ大人の気絶して

起つりなれしく低下の覚なれハかしこくも病
をもうてもお同眠さらく昏睡して死る也
精神もも元気怖りてとしめて啼くしあえて
言ふあり世の人是れをあやすして冷する灸とか
してやすく火熱肉を炊てつひて死といふすされ
あるハのかしてすやいりくにの事はまさるへて灸
すへし

疳

小児疳病ハ面色青くきたハ黄ろみ形体羸痩